明智光秀の生涯

「歴史人」平成三十年七月号

「歴史旅人」令和元年十月号

令和２年７月26日

明智光秀の生涯

○　初めに

今年の大河ドラマ「麒麟がくる」の主人公は明智光秀です。光秀は、一五八二年に本能寺で主君織田信長を討った謀反人とか。三日天下という暗いイメージを持っています。そこで、一体どんな人生を歩んだか調べてみます。

○　謎の出生について

年齢は「明智軍記」によれば、享禄元年（一五二八）生まれで、天正十年（一五八二）に自刃したときは、数えで五十五歳と記してある。一方、「当代記」によれば、永正十三年（一五一六）生まれで、六十七歳で自刃とある。

明智家は「土岐系図」や「明智系図」、さらに「明智軍記」によると美濃の守護土岐氏の支族になっている。また、出生地に関しては、以下のいくつかの説があるが、有力な説は、可児市、恵那市と言われている。

明智光秀の出生について、

①　美濃長山（明智）説　可児市

可児市に「明智城跡」がある。瀬田にある天龍寺には、明智氏歴代の墓所と光秀の等身大の位牌が安置されている。「美濃国諸旧記」から。

②　美濃明智　説　恵那市

恵那市に宝治元年（一二四七）に築城された明知城の出城として、落合砦がある。光秀はこの砦で生まれたとされている。近くには、産湯の井戸が現存している。さらに、恵那市には、光秀の実母於牧の方の墓所や光秀が若い頃に学んだ学問所のある天神神社がある。

③　美濃顔戸（ごうど）説　御嵩町

光秀にも仕えた可児才蔵は、美濃国可児郡で生まれ、幼少時を願興寺で過ごしたとされる。才蔵は光秀のもとで本能寺の変に従い。山崎の合戦では光秀の影武者をつとめたとの説がある。

④　美濃鶴ヶ城・一日（ひと）市場　説　瑞浪市

瑞浪市の一日市場八幡神社境内には光秀を輩出した土岐氏発祥の地「一日場館」跡がある。また、境内の片隅に光秀銅像がある。

⑤　美濃中洞　説　山県市

山県市にある大桑城は土岐氏の山城で、東方に中洞地区に桔梗塚がある、ここが光秀の墓だという案内板がある。入り口には光秀が産湯に使ったとされる井戸跡もある。山崎の戦いでは影武者の荒木行信が死んで、光秀は生き延び、自ら荒深小五郎として西洞寺の林間に隠れ住んだという伝説が残っている。

⑥　美濃多羅　説　大垣市上石津町

大垣市上石津郷土資料館に多羅出生説に関する「明智一族宮城家相伝系図書」の複写や史料の展示がある。それによれば、光秀は享禄元年（一五二八）に父は明智光隆、母は武田義統の妹の間に美濃多羅城で生まれたとの説がある（『明智系図』。一方、大垣市は、『明智一族宮城家相伝系図書』（東京大学史料編纂所）などを基に、明智光綱（光隆）の妹が美濃国石津郡の多羅（現在の大垣市上石津町多良）を領した進士信周に嫁いで産んだうちの次男を光隆の養子として、長じて光秀

となったとしている

⑦　近江佐目（さめ）説　滋賀県多賀町

多賀町佐目地区の十二相神社門前にある明智光秀公口伝の地「十兵衛屋敷跡」である。最古の古文書「淡海温故録」から。

○　明智光秀の年表について

享禄元年（一五二八）一歳

明智光秀誕生と伝わる。「明智軍記」「細川家文書」から。諸説として、「当代記」から永正十三年（一五一六）。

弘治二年（一五五六）二十九歳

四月、斎藤義龍により明智城落城。光秀は越前に逃れる。光秀は朝倉義景のもとで、長崎（福井県坂井市丸岡町）の称念寺門前に十年間居住か。称念寺（新田義貞の墓所）の寺伝には十年間にわたり門前で寺子屋を開いていた「明智軍記」によれば、義景から五百貫の知行を与えられ鉄砲寄子百人を預けられた。

永禄六年（一五六三）三十六歳

長曾我部元親、石谷頼辰（いしがいよりとき）の妹を娶る。光秀は頼辰を通じて元親と知り合う。

永禄八年（一五六五）三十八歳

五月、十三代将軍足利義輝が、三好三人衆（三好長慶の重臣。長逸（ながやす）・政康・岩成友通の三人）らに弑逆（しいぎゃく）される。弟覚慶（足利義昭）は興福寺から脱出し、織田信長に上洛援助を要請する。

永禄九年（一五六六）三十九歳

九月、義昭、朝倉義景を頼り越前へ。

注　十月頃、光秀は朝倉家秘伝の付薬「生蘇散」という金瘍（刀剣による切傷）用の薬の調合方法の知識を身に付けていた。

永禄十年（一五六七）四十歳

この年、光秀が朝倉義景の家臣として足利義昭、細川藤孝と出会う。以降、義昭との両族関係となる。義昭の家臣として藤孝とともに信長と交渉。

永禄十一年（一五六八）四十一歳

二月、義栄に十四代将軍宣下。

五月以前、光秀は足利義昭の足軽衆として臣従。（永禄六年諸役人附の後半部に記載。この「足軽」とは、騎乗しない将軍近臣）

七月、義昭とともに越前一乗谷から美濃へ移る。織田信長は美濃立政寺に義昭を迎える。

八月、藤孝と信長の間をとりもつ。

九月、義昭に奉じた信長に従って、光秀も上洛。

十月、義昭に十五代将軍宣下。義栄、阿波で病死。

永禄十二年（一五六九）四十二歳

一月、三好三人衆が京都本圀寺の将軍義昭を襲撃。義昭に加勢し光秀、足軽衆と共に防戦。

二月、信長、義昭のために室町に二条城築城開始。

四月、光秀、幕府の奉公衆として京都の行政に関与。

六月、光秀、義昭の使者として信長に謁見

参考　光秀は、義昭側近という立場は維持したまま、二人の主君に仕える両属状態であった。

元亀元年（一五七〇）四十三歳

一月、信長が義昭に五か条を提示。光秀と朝山日乗（法華宗の僧）が取り次ぐ。

四月、将軍・義昭から山城・久世山荘を光秀に与える。

越前の朝倉義景討伐の軍をおこした織田信長が、越前に攻め入ろうとしたときに近江の浅井長政が離反して、挟撃を受ける危

機に見舞われた。信長、越前より敗退、金ケ崎の退き口成功に貢献。
五月、丹羽長政とともに若狭へ着陣
六月、姉川の戦い（信長・家康の連合軍と浅井長政・朝倉義景の連合軍との戦い）
九月、山城国の勝軍山城に入り、浅井軍の警戒にあたる。
志賀の陣（信長と浅井長政、朝倉義景、比叡山延暦寺の戦い）
信長と顕如による石山合戦始まる。
光秀ら上洛し、二条城の番につく。
十一月、光秀が勝軍山城を出て吉田神社の吉田兼見を訪ねる。
この年に、長子（十五郎）生まれる。また、この年末には、近江宇佐山城に入城。

元亀二年（一五七一）四十四歳

七月、光秀、近江宇佐山・志賀城に在城。
九月、信長の比叡山延暦寺焼き討ちに従軍。摂津・高津に出陣。
十二月、信長、光秀に近江志賀郡を与えて家臣とする。坂本城築城開始。
正親町天皇から光秀の押領（洛中に米を貸し、その利息）をやめるよう信長に苦言が入る。
参考　この横領のため義昭から謹慎を受けたようで、側近の曽我助乗に取り成しを依頼している。文書には、「御暇申上候」と記されている。この頃から義昭のもとを離れようとしている。

元亀三年（一五七二）四十五歳

閏一月、光秀、坂本築城中に吉田兼見の訪問を受ける。（十二月訪問時には兼見が天守に驚く）
三月、信長に従い近江に入り木戸・田中両城を攻める。
四月、三好義継、松永久秀、信長にそむく。
七月、信長に従い、近江の浅井長政を攻める。
九月、信長、義昭に十七条の異見状（弾劾状）を送りつける。
十二月、家康・信長の連合軍が武田信玄と遠江三方ヶ原で戦かったが、敗退する。　光秀、坂本城の天守を完成させる。
参考　閏一月から築城し短い期間で完成しているから、宇佐山城の資材を活用したことが分かる。

天正元年（一五七三）四十六歳

一月、光秀が武田攻めのため出陣する。
二月、光秀ら石山を攻めてこれを降す。次いで今樫田の本願寺勢を攻めてこれを破り、滋賀郡を過半平定する。
三月、藤孝、義昭を離れ信長に仕える。
四月、武田信玄、信濃駒場で病死。
五月、二月に今樫田城を攻撃した際、討ち死にした家臣の供養のため、坂本・西教寺に寄進する。
六月、坂本城で連歌会を催す。この頃、坂本城がほぼ完成。
七月、信長に従い、光秀・藤孝、義昭を山城槇島城（京都府宇治市槇島町）に攻める。義昭、降伏。室町幕府滅亡。
信長、近江木戸・田中両城を陥れこれを光秀に与える。
信長、光秀と村井両人に京都代官に任命。
八月、朝倉義景自刃。
九月、浅井長政自刃。
参考　九月以降、村井貞勝と一緒に京都代官を担当し、天正三年七月まで市政を担当する。

天正二年（一五七四）四十七歳

一月、松永久秀が大和・多聞山城を開城した後に光秀、城代として入城する。
二月、信長に従い、東美濃に出陣。

四月、石山本願寺の顕如、挙兵。
七月、信長、藤孝らとともに京都代官に就任。
三淵藤英（藤孝の異母兄）、坂本城で信長の命により自害。
八月、信長、長島一向一揆を滅ぼす。
九月、佐久間信盛、細川藤孝らと河内に出陣、本願寺衆徒を破る。
十月、光秀が河内・高島城を攻める。

天正三年（一五七五）四十八歳

正月、信長から丹波平定を命じられる。
四月、再び河内・高島城に三好康長を攻める。
六月、丹波・八木城主の内藤貞勝、宇津城主の宇津頼重の討伐に、光秀も援軍として派遣される。
七月、信長の推挙で惟任へ改姓、あわせて日向守に任官する。
八月、信長に従い、越前一向一揆攻めで活躍。
九月、信長から丹波出陣を命じられる。
十月、信長、長曾我部元親の子に「信」の一文字を与える。光秀の取次で元親、光秀と同盟を結ぶ。
十一月、荻野直正の丹波黒井城に攻める。国衆の太半は光秀につく。

天正四年（一五七六）四十九歳

一月、再度、丹波・黒井城を攻めるが、八上城の波多野秀治の離反によって大敗。坂本に帰城。
二月、信長、安土城へ移る。光秀が再び丹波に出陣するも短期間で退陣することに。
四月、信長の石山本願寺攻めに従軍する。
五月、石山の陣中に発病（感染性胃腸炎　風痢）し帰京する。曲直瀬道三宅で治療を受ける。七月、病気が回復し、吉田兼見と面会。
十一月、光秀の室煕子（光秀からの感染か）、没。この頃、光秀、丹波亀山城の築城開始。

天正五年（一五七七）五十歳

三月、信長に従い、紀伊雑賀党、鈴木孫市を攻める。
八月、松永久秀、信長に背き、大和・信貴山城に入る。
十月、信長、秀吉に中国地方攻略を命ずる。
大和・信貴山の松永久秀攻めの軍に加わる。久秀自害。細川藤孝とともに丹波・籾井城を攻め、丹波攻略を再開する。
十一月、光秀が信長に籾井城攻め報告のために上洛する。

天正六年（一五七八）五十一歳

一月、坂本城で茶会を催す。
三月、上杉謙信没。光秀、波多野秀治を八上城に攻める。
四月、滝川一益らと播磨・上月城攻めの秀吉軍に赴援する。
七月、信忠に従い播磨・神吉城を攻めこれを陥れる。
八月、信長の命により娘玉（ガラーシャ）を細川忠興に嫁がす。
九月、丹波に入り小山城を攻める。次いで高山・馬堀両城を陥れる。
十月、荒木村重が信長に離反。光秀、謀反した村重の説得に派遣される。村重の嫡男村次は光秀の女婿。
十一月、信長に従い、摂津・有岡城に荒木村重を攻める。
十二月、摂津から丹波に戻り、八上城を兵糧攻めにする。

天正七年（一五七九）五十二歳

一月、坂本城で茶会を催す。
二月、丹波に出陣し諸城を攻める。
五月、信長、完成した安土城天主に移る。光秀、丹波・氷山城を落城させる。

六月、波多野秀治（三兄弟も）の丹波・八上城落城させる。
七月、宇津頼重の丹波・宇津城を陥る。同鬼ヶ島城を攻める。
御料所丹波山国荘を回復した功により、正親町天皇より鎧など賞を賜る。
八月、丹波・黒井城を攻め、赤井忠家を降す。光秀、丹波を平定。「明智は天下に面目をほどこすこと、これ以上のものはなかった」（信長公記から）
九月、荒木村重、有岡城から尼崎城へ移る。丹波国領域を攻略する。
十月、安土城で信長に丹波・丹後平定を報告する。
参考　天正三年以来進めてきた丹波平定を成し遂げ、信長からはその恩賞として丹波を宛がわれ、丹後の細川と一色氏を与力として預けられる。さらに、大和・郡山城主の筒井順啓も与力となる。
十一月、誠仁（さねひと）親王、二条新御所に移る。光秀ら、奉行を務める。

天正八年（一五八〇）五十三歳（人生最良の年）

一月、坂本城で茶会を催す。
閏三月、信長、本願寺の顕如と和睦（四月に顕如、八月に教如、大坂を退去）。
光秀、坂本城を修築。
四月、信長の命により、備中の秀吉を赴援（助けに行く）
八月、信長、佐久間信盛を高野山に追放。
この頃、光秀に丹波、藤孝に丹後一国を与えられる。
九月、光秀及び滝川一盛、大和の寺社本所以下国衆に指出を命ずる。
十月、御料所丹波・山城国荘の貢租を献（ささげ）る。
十一月、信長、筒井順慶に大和を与えられる

天正九年（一五八一）五十四歳

参考　丹波経営に勤めた年である。八上城は明智光忠、黒井城は斉藤利三、福知山城は明智秀満が、光秀から権限を預けられて城代となっている。
一月、坂本城で連歌会、茶会を催す。信長、安土で馬揃えをする。
二月、信長により京都で馬揃えが行われ、光秀が奉行を務める。
四月、細川藤孝父子に丹後に招かれ茶会に出席し、細川藤孝らと天橋立に遊ぶ。
六月、『明智家中軍法』を定める。
注　この書の最後に次の記述がある。「そこで群を抜いて粉骨砕身し忠節を励めば、速やかに主君の耳に届くであろう。（ここに、光秀の信長に対する本意が入っている）」
八月、御妻木氏（光秀の妹）死す。（御妻木は信長の側室？）。
大和郡山城の修築を巡検する。因幡に出兵して秀吉を援ける。
九月、信長、丹後一色義有らの知行を割きて光秀・藤孝に与える。
十二月、『明智家中法度』五か条の制定

天正十年（一五八二）五十五歳

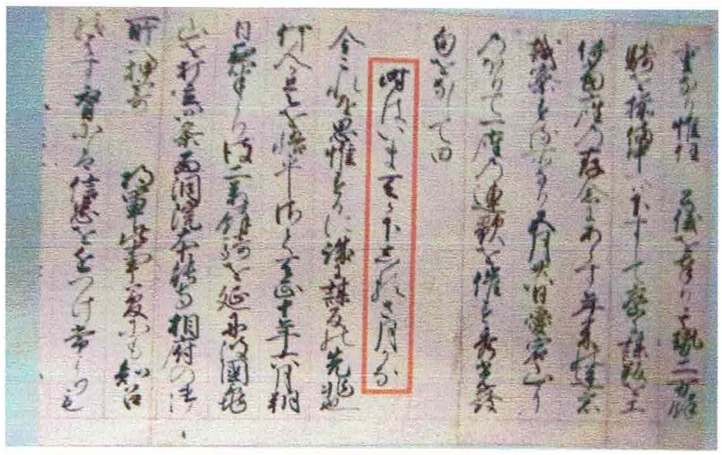
一月、光秀、石谷頼辰を長曾我部元親説得に派遣。
三月、信長、安土より甲斐に出陣。光秀ら従軍する。武田勝頼、自害する。信長、家康領を視察して帰陣。
五月七日、信長、信孝に四国征伐を命ずる。
次いで、信孝、織田信澄（信長の弟子：妻は光秀の娘）らと摂津に出陣。秀吉、備中高松城を攻める。毛利輝元の軍、同城に赴援する。

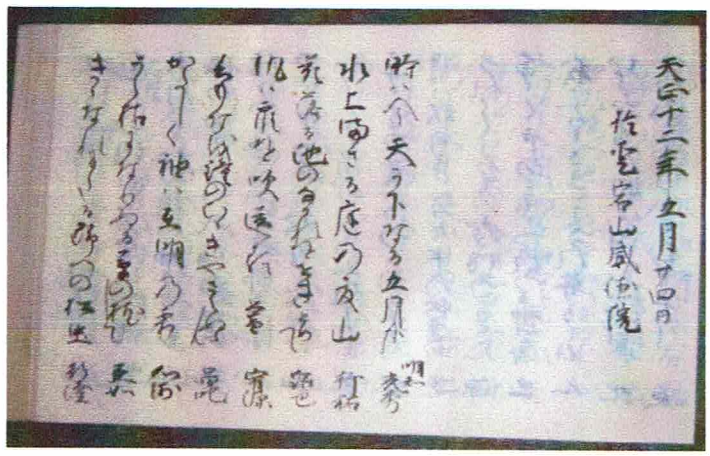
十四日、信長より家康の安土登城の際の饗応役を命じられる。
十五日、家康、穴山信君と安土に来り、信長に加封を謝す。
注　信長の光秀折檻事件（フロイスの日本史と稲葉家譜）
十七日、中国出陣を命ぜられ、坂本城に帰る。
二十一日、信忠、京都妙覚寺に入る。家康ら安土を発し京都に向かう。
二十六日、丹波亀山城へ入る。
二十七日、愛宕山参詣し籤を三度引く。（愛宕百韻愛宕神社で意中の籤が出るまで三度おみくじを引いたと伝えられている。
参考　ただし、神籤を三度引いて三角に置き、銭を三枚放り投げて一枚だけ表裏異なる位置の神籤を神意として読むという擲銭法による占いは当時一般的に行われていた）
二十八日、愛宕山にて里村紹巴と百韻連歌会を催す。「ときは今雨が下知る五月哉」
後、亀山城に帰る。「時は今あめが下なる五月かな」の説もあり。
晦日二十九日、光秀、亀山城にて出陣準備する。
信長の命により、丹波と近江を出雲・石見の二か国に国替え。
六月一日　亀山城を酉の刻（午後六時前後）に出る。老ノ坂峠を越え山城国に入る。
二日、
午前5時頃、桂川を渡り、全軍に信長討伐の命をくだす。
午前6時頃、一万三千の兵で信長を本能寺に攻める。信長、自害する。
午前7時頃、本能寺が炎に包まれる。
光秀、軍勢を信忠が宿泊する妙覚寺に差し向ける。
信忠、変を知り妙覚寺を出て、二条御所へ入る。
午前八時頃、信忠を二条御所に囲み、激戦を繰り広げる。
午前9時頃戦闘終了。信忠、自害。
午後2時頃、光秀、安土城に向けて京を出発。瀬田城主・山岡景隆が光秀の進軍を拒んで、瀬田川の瀬田橋を焼く。光秀、橋の修復を命じて夕刻、一旦坂本城に入る。（三日、四日と坂本に在城）
三日、日野城主・蒲生賢秀が信長家族等を連れて安土城を退去、日野に避難。
四日、秀吉、毛利輝元と和議を結び、上方に向かう。
五日、光秀、瀬田橋の修復を終えて安土城に入る。安土城天主に登り、信長の財宝を家臣に与える。同時に長浜・佐和山を占領。
七日、安土に勅使の吉田兼見と面会する。朝廷、光秀を新たに統治者と承認。
八日、安土城から坂本城に入る。
九日、光秀、上京し、勅使派遣の礼として、朝廷に銀子五百枚、大徳寺・京都五山に銀子百枚ずつ献上を兼見に託す。期待していた正親町天皇の勅命や奉書が出てこない。来た奉書は誠（さねひと）親王からのもの。
細川藤孝父子に書状で参陣を促すが、藤孝らは応ぜず。
光秀、焦燥する。
参考　三日に藤孝は剃髪して「幽斎」と名乗り、家督・宮津城を忠興に譲り、田辺城に隠居する。忠興は妻玉を丹後の屋敷に幽閉する。
十日、洞ヶ峠に布陣して、大和郡山城・筒井順慶の参加を待つが、協力なし。
十一日、光秀、失意のなか下鳥羽に転陣。秀吉、尼ヶ崎に至る。想定外の事態に急遽山崎へと兵を進める。

十二日、土橋重治に出陣を要請。本願寺の使者が派遣される。
十三日、山崎の合戦で秀吉軍に敗北。小栗栖で一揆勢に襲撃され自害する。
十五日、安土城天主が、原因不明の焼失。堀秀政、坂本城落城。
明智秀満（光秀の家臣）・光秀の妻子らを刺殺して自害する。
十七日、秀吉ら光秀の首を本能寺にさらし、次に、光秀らの屍を栗田口にはりつけにする

○　参考　古文書　から

① 天正十年五月二十八日愛宕山にて百韻連歌会の和歌の違い





上の写真は惟任退治記を書写したもの総見院殿追善記
（歴史人二〇二〇年二月号）
ここには「時はいま天が下志るさ月かな」とある。
和歌の意味は
「土岐氏である自分が天下を治めるべき季節の五月になった」という謀反の決意
下の写真は京都大学付属図書館所蔵の愛宕百韻（歴史人二〇一八年七月号）
ここには「時はいま天が下なる五月かな」とある
和歌の意味は、「土岐氏は今、五月雨にたたかれているような苦境にある五月である。」
（六月になれば、この苦境から脱したいという祈願）
気になるのは天正十二年と書いてある

②　信長の光秀折檻事件

史料一　イエズス会宣教師ルイス・フロイスの「日本史」
天正十年五月中旬、光秀が安土城で徳川家康の接待役をつとめたときである。信長と密室で話していたら、光秀が口答えをしたので、信長は激怒して光秀を足蹴にしたというのである。
史料の二　稲葉一鉄の後裔である臼杵稲葉家の「稲葉家譜」
「天正十年、稲葉一鉄の家老那波直治が稲葉家を去って光秀に仕えた。光秀は彼を厚く遇した。一鉄は大いに怒って先に利三を召し抱えただけでなく、今度は直治まで招いたとして信長に訴えた。信長は光秀に命じて直治を一鉄に返させた。そのうえで利三に自害を命じた。そのとき、側近の猪子兵介が光秀のために取り成したので、利三は死を免れた。しかし、

信長は光秀が法に背いたのを怒って譴責し、自ら光秀の頭を二、三度叩いた。光秀の髪が薄く常に付け髪を用いていたが、それが打ち落とされたので、光秀は信長の仕打ちを深く含むところがあった。光秀の叛逆の根源はここに起因する。すでに直治は濃州に帰り、元のように一鉄に仕えた。」

この事件こそ、光秀と利三が一緒に謀反を企てるきっかけとなる。

③ 本能寺の変直後の書状

明智光秀書状写

（国立公文書館所蔵「武家事紀」二五）

（織田信長）父子悪逆天下之妨討果候、其表之儀御馳走候て、（大垣城主）大垣之城可被相済候、委細山田喜兵衛尉可申候、恐々謹言、　光秀

（天正十年）六月二日　（惟任日向守也、）惟日（光秀）在判

（西尾光教）西尾小六也　西小　御宿所

本能寺の変の直後の六月二日に美濃の野口城主西尾光教へ送った書状がある。「信長父子の悪逆は天下の妨げ、討ち果たし候、其の表の儀御馳走候て、大垣の城相済ますべく候、委細山田喜兵衛尉申すべく候」（大垣城主の氏家直昌は西尾光教の妻の甥にあたる）。

「其の表の儀御馳走候」の意味は、自分より上位の存在に対する「馳走」、つまり、名前こそ出さないが「そのお方様のために存分に働きなさい」と、信長父子の悪逆は天下の妨げになるから打ち果したという大義により決起を促している。

では、そのお方様は一体誰を意味しているか。それは将軍、足利義昭を意味するものとも推測できる。光秀の心の奥までは分からないけど、足利幕府再興説につながる。

④ 六月九日　覚　細川忠興へ

明智光秀覚（永青文庫所蔵「細川家文書」・肥後）○折紙

覚

一、（細川藤孝・忠興）御父子もとゆゑ（元結）御払候由、尤無余儀候、一旦我等も腹立候へ共、思案候程、かやうニあるべきと存候、雖然此上は大身を被出候て、御人魂所希候事、

一、国之事、内々摂州を存当候て、御のぼりを相待候つる、但、若之儀（状脱カ）思召寄候ハヽ、是以同前ニ候、指合きと可申付候事、

一、我等不慮之儀存立候事、忠興（細川）なと取立可申とての儀ニ候、更無別条候、五十日・百日之内ニハ、近国之儀可相堅候間、其以後者十五郎（細川興元）、与一郎（細川忠興）殿なと引渡中候て、何事も存間敷候、委細両人可被申候事、

以上

（天正十年）六月九日　光秀（花押）

三か条の内容をまとめてみると。

一　藤孝・忠興親子が髷（まげ）を切ったことに対して、光秀は最初立腹したが、改めて二人に重臣の派遣を依頼し、親しく交わって欲しいと要請したこと。

一　藤孝・忠興親子には内々に摂津国を与えようと考えて、上

洛を待っていた。
ただし、若狭を希望するならば、同じように扱う。
遠慮なくすぐに申し出て欲しいということ。
一　私（光秀）が不慮の儀（本能寺の変における信長謀殺）を行ったのは、
忠興などを取り立てるためであった。それ以外に理由はない。
五十日、百日の内には、近江の支配をしっかり固め、それ以後は明智光慶と忠興に引き渡して、自分（光秀）は政治に関与しないこと。
注：光秀が藤孝・忠興父子に味方になるように哀願したが、事前準備が不十分だった様子がうかがえる。結局、藤孝・忠興父子は光秀に与（くみ）せず、ほかの当てにして諸将（筒井順慶ら）も同じ態度を取った。

⑤　六月十二日　明智光秀最後の直状　雑賀五郎へ

明智光秀書状

（「森文書」）○切紙カ

「包紙ウハ書」
雑賀五郎
上橋平尉殿　御返報

惟任日向守
光秀」

尚以、急度御入洛義（儀）御馳走肝要候、委細為上意、可被仰出候条、不能巨細候、

如仰未申通候処ニ
上意（足利義昭）馳走被申付而、示給快然候、然而御入洛（足利義昭）事、
即御請申上候、被得其意、御馳走肝要候事、
一、其国儀、可有御入魂旨、珍重候、弥被得其意、可申談候事、
一、高野（紀伊伊都郡）・根来（紀伊那賀郡）・其元（雑賀衆）之衆被相談、至泉（和泉）・河表（河内）御出勢尤候、知行等儀、年寄以国中談、後々迄互入魂難遁様、可相談事、
一、江州・濃州（後カ）悉平均申付、任覚悟候、御気遣有間敷候、尚使者可申候、恐々謹言、

六月十二日（天正十年）　光秀（花押）

雑賀五郎（紀伊海部郡）

上橋平尉（平治）殿　御返報

〔現代語訳〕
○本文　仰せのように、いままで音信がありませんでしたが（初信であることを示す慣用表現）、
上意（将軍）への奔走を命じられたことをお示しいただき、ありがたく存じます。

しかし ながら（将軍の）ご入洛の件につきましては、既にご承諾しています。
そのようにご理解 されて、（将軍に）ご奔走されることが肝要です。
一、雑賀衆が当方に味方されることについては、ありがたく存じます。
ますますそのよう に心得られて、相談するべき事。
一、高野衆・根来衆・雑賀衆が相談され、和泉・河内方面まで出陣されることはもっとも なことです。
恩賞については、当家の家老とそちらが話し合い、後々まで互いに良好な関 係が続くように、相談するべき事。
一、近江・美濃までことごとく平定することを命じ、それがかないました。ご心配される ことはありません。なお使者が口上で申すでしょう。
○尚々書き（追伸） なお、必ず（将軍の）ご入洛のことについては、ご奔走されることが大切です。
詳細は上 意（将軍）からご命じになられということです。委細につきましては、（私からは）申し 上げられません

この書状で分かったことは
①「天正十年）六月十二日付土橋重治宛光秀書状」が、本能寺の変以降の確実な光秀書状であることが分かる。
② 光秀自身が天下人を目指したのではなく、義昭の帰洛による室町幕府再興のためにクーデターを起こしたことが分かる。

○ 終わりに

明智光秀の最大の功績は天正三年から七年まで行われた丹波平定です。その後、城町の整備と統治に務めた。信長公記には「明智は天下に面目をほどこすこと、これ以上のものはなかった」と書かれています。また、家臣が戦いで負傷した後、状態を尋ね、見舞いをしており、人間的な優しさを持っている。さらに、信長に対する深い恩義と織田家に対する気配りから伝わる、忠誠心の強さである。

天正九年（一五八一）六月二日に定めた軍法の最後の部分に注目しよう。「粉骨砕身し忠節を励めば」など、自からを見出してくれた信長への感謝が現れた文章がある。

また、里村紹巴や細川藤孝ら連歌などの文学を通じた友人に見せる親密さもあるなど、教養人として別の一面を持っている。

このようなイメージからは、家中法度制定からわずか一年後に大恩ある主君を葬ったことが、誠に不思議に思えてくるのである。

したがって天正九年からの光秀を取り巻く政治環境の大きな変化が、本能寺の変を起こさせたのではないかと思う。

このように、明智光秀は「人間的な優しさ」と「主君に対して忠誠心」を持った武将です。でも、なぜ「信長父子の悪逆は天下の妨げ、討ち果たし候」という歴的な事件を起こさなければならなくなったか。また、「信長父子の悪逆は天下の妨げ」とは何を意味にしているのか。光秀の心の奥に分け入ってみてください。ここに、本能寺の変の複合的原因がありそうです。

その一 信長の四国政策の転換。天正十年五月信長は三男信孝に四国国分令（信孝に讃岐を、三好康長に阿波）を発する。

これで、今まで培ってきた長曾我部元親との信頼関係が崩れる。
その二　信長の光秀折檻事件。前述
その三　国替えによる左遷。「明智軍記」によると、信長からの命令をうけ、出陣の準備のため自分の居城にもどった光秀のところに、信長からの使いとして青山与三が訪れ、「出雲・石見の二か国を与える。その代わり、丹波と近江の志賀郡は召し上げる」という命令を伝える。これは、京都奉行・近畿管領として政権中枢にあった光秀にとって、京都より遠く離れた出雲・石見の場所に問題があったのである。栄光の座から引きずり降ろされたと感じたはずである。
その四　信長から備中高松城攻め羽柴秀吉の援軍を命じられる。これは、長年、ライバルとして功を競っていた秀吉に一歩リードしたと思った光秀が、秀吉の配下につくということで、内心穏やかでは無くなっていたはずである。
以上から、謀反に至る動機を光秀の心の変化から解き明かしてみることにする。
四国政策の転換や折檻事件から光秀のメンツが潰れ悲観的になる。また、自分自身の将来にも不安になり、主君信長に対して懐疑心を持つようになる。国替えから政権中枢の立場にいるという自己顕示欲を失うことになる。さらに、秀吉の配下になることにより自尊心までも傷つくことになる。このように主君信長に対しての恨みや怒りが溜り、敬意や信頼を光秀は持てなくなる。
最後に決定的動機は、六月二日早朝には信長・信忠親子が警備の手薄な本能寺・妙覚寺にいたという絶好のチャンスを逃すと次の機会があるとは限らない。そこで、信長に自害を命じられ、遺恨をもつ家臣斎藤利三と一緒に衝動的に主君殺しというクーデターを起こすことになる。殺害後の書状から鑑みるに、光秀自身が天下人を目指したのではなく、義昭の帰洛による室町幕府再興を考えていたと思われる。

○　明智光秀の子孫

光秀に子女が何人いたかを調べてみると、「系図纂要」には三男五女、「明智系図」には六男五女、「太閤記」には三男三女、「明智軍記」には三男四女とまちまちです。「明智軍記」によると、
正室　妻木熙子の間に三男四女がいる。
長女は家臣　明智秀満に嫁ぐ。坂本落城の際、夫の秀満に殺害される。
二女は家臣　明智光忠に嫁ぐ。本能寺の変で二条御所の攻撃に参加していた光忠は負傷し、二女は自害する。
三女　玉（洗礼名ガラシャ）は一五六三年に越前で生まれ、一五七八年勝龍寺城主細川忠興（父は与力の藤孝＝幽斎）に嫁ぐ。本能寺の変後、夫の忠興に味土野に幽閉さるが、離縁はしていない。関ヶ原の戦いの際、石田三成によって人質にされそうになるが、家臣に命じて自らの命を絶つ。忠興との間に生まれた忠利が、肥後熊本城藩主となる。
四女は津田信澄（信長の弟信勝の子）に嫁ぐ。本能寺の変の直後、夫の信澄は、光秀の娘婿ということで殺害され、四女は、夫と共に殺害されたとも、坂本城にいて明智秀満の手で殺害されたともいう。
長男　光慶（十五朗）は山崎の戦いの後、丹波亀山城を守っていたが、羽柴秀吉に味方する摂津茨木城主中川清秀と摂津高槻城主高山右近に攻められ自害する。

二男十次郎と三男乙寿丸は山崎の戦いのとき坂本城にいる。このとき坂本城を守っていた光秀の家臣明智秀満は、羽柴秀吉に味方する堀秀政の軍勢を防ぐことができず、光秀の正室熙子と次男・三男を殺害し、自ら自害する。

他に、側室が三人います。

側室　喜多村保光の娘

男子　喜多村弥兵衛（保之）

側室　原仙仁の娘の間に　六男二女がいる。

長男松寿、二男秀寿丸、三男　僧不立、四男於鶴丸、五男光保、六男浅野内蔵助（子の子孫に大石内蔵助）

長女　秀子（信長は養父）は筒井定次（父は与力の順慶の養嗣子）に嫁ぐ

二女　川勝丹波守秀氏に嫁ぐ。

側室（不詳）の間に女子がいて井戸治秀に嫁ぐ（子孫に石見守弘道がいる）

○　江侍聞伝録（二〇二〇年一月十五日発見）について

前半生が謎とされる戦国武将明智光秀の出生地について、滋賀県多賀町中央部の「佐目」と明記した一六七二（寛文十二）年編さんの古文書「江侍聞伝録（ごうじもんでんろく）（禄）」が、県立図書館（大津市）で確認された。同様の記述は、同一著者とみられる貞享年間（一六八四～八八年）の「淡海温故録（おうみおんころく）」にもあるが、江侍聞伝録はそれより古く、調査をした県教育委員会の専門家は「成立年代がはっきり分かり、光秀の出生地を記した最も古い史料」と指摘している

著者は木村重要（生没年不詳）で、佐目から十数キロ南西部に位置する近江国神崎郡（現在の滋賀県彦根、東近江市辺り）の人物とみられるという。江侍聞伝録は全2冊で、中世の近江国の土豪・地頭の家系を地域ごとに記している。

自筆とみられ、一冊目に、明智十左衛門という侍が濃州（美濃国）から佐目の里に逃れて来て二、三代が住み、出生年は不明ながら「光秀」が生まれたと書かれている。信仰すれば千人を従える大将になれるという大黒天を、千人では物足りないと捨てた野心家の一面をうかがわせるエピソードもある。その後に完成した温故録のベースになったとみられ、織田信長を討った本能寺の変（一五八二年）後、豊臣秀吉と戦った山崎の戦いで多くの近江の人々の加勢を得られた理由については、「江州生国」（近江で生まれた）とする。

光秀の出生地を巡っては、佐目の東に位置する美濃国（岐阜県）説がある。根拠とされ、安土桃山時代に活躍した立入宗継による覚書には、一五七九（天正七）年六月十日の出来事の一節に「美濃国住人ときの随分衆也　明智十兵衛尉」と記されている。光秀は当時、近江や丹波を拠点としており、「住人」は出身地を意味すると解釈されてきた。

しかし、県教委文化財保護課の井上優さんによると、当時の武将は生まれた土地だけでなく、先祖の所領地も出自と位置づけており、近しい人物でない限り、出生地までは知り得なかったという。その上で、「『住人』は、光秀の生まれた地域、光秀の先祖の所領地、土岐氏の所領地のどれを指すのか判然としない」と話す。

また、江侍聞伝録には、光秀の先祖の名は十左衛門という通称名のみ記されている。井上さんによると、当時は地位の高い人物でないと、諱（いみな）（元服時の正式な名前）が記録に残らない場合が多かったといい、「編さん時、通称名程度の情報

しか伝わっていなかったのはかえってリアリティーがある。美濃出生説を見直す史料として意味がある」と注目している。

以上。二〇二〇年一月十五日付京都新聞から引用

○　表紙の写真について

天正十年六月二日に親織田信長を本能寺で、子信忠を二条城で自害させ、十三日に羽柴秀吉と山崎の戦いをするまでの足跡を示したものです。

天正三年信長から丹後平定を命じられ、天正七年までの戦いの後を示したものです。

○　最後にある表について

明智光秀が指揮した戦いの結果
稲葉良通（一鉄）からみた系図

○　参考文献

一　明智光秀　藤田達生・福島克彦編　八木商店
二　本能寺の変　四三一年目の真実　明智憲三郎　河出書房
三　歴史人二〇一八年七月号）
四　歴史人二〇二〇年二月号
五　明智光秀と斎藤利三　桐野作人著　宝島社新書